

の墓前に詣で、先生の冥福を御祈りすると同時に私共の至らぬ事を深く御詫びする事が出来ました。

晩年の五島清太郎先生

木村雄吉

大正14年の春から昭和10年夏迄の満10ヶ年餘りが、親しく私が先生の御教示を仰ぎ得た歲月であります。先生は御齡59歳から69歳に亙つてのことでありました。私が先生に接し得る機会に恵れた時は、もう先生の御一代の終りの部分だつたのであります。然し幸運な私は、この偉大な人の完成期に接觸することが出来ました。既に數知れない鍊磨を経られた先生は、深い確信と自覺とを以つて私共に臨まれたのみでなく、又先生御自身、人間の最後の完成の爲に休息無き精進の生活を私共の面前に行ぜられました。“働くことは生きてゐることの作法である”と、先生は私に申されました。あの寡言靜寂な先生の内奥に包まれた深き思想には、私は理解の及ばないことを愧ぢなければなりません。然し先生が行爲を以つて私に仕向けて下された様々の御教示は、私にとつては感佩の極みに存じます。

“Selbsttätigkeit allein führt zur Bildung.”

之は生物學を學ぶ爲に集つた私共に對して、先生が先づ示された御言葉であります。單に知識の獲得が學問の第一義を成すものとは存ぜられません、そのまことな姿を直接自然に求むるこそ學問なのでありませう。この學究に旅立つ私共の心構へを深く先生は戒められました。私が最後の學生として先生の御指導を戴きました時、“先づ自然を觀よ”、又“他を批判する心を以つて自らを批判せよ”と先生は申されました。“selbsttätig”こそまことに學完成の爲の態度であり、又方法でもあつたのであります。先生御自身の行爲は終始この信條によつて貫かれて居りました。先生の御言葉は總べて常に行爲によつて力強く裏付けられてゐるのを見ました。このことは先生に、より近く近づけさせて戴くほど益々明かに看ることが出来ました。先生が私共を教育なさるにあつても、單に講壇からの説教的な教育方法を探られずに、先づ私共自身の體驗に訴へるやう仕向けて下され、その體驗の批判又體驗への反應の仕方は大膽にも各自の自由にゆだねられました。“正しい方向へのStartを與へることは出来るが、その後は各自の力に應じて拓いて行くのだ”と先生はよく申されました。茲に先生の謂はば「自由の學風」が存したと同時に、一見如何にも近寄り難い先生の風格を生んだことと存じます。然しながら、私は私なりの苦心を述べて教へを乞ふ場合は、眞剣に傾聴下され先生獨特の放我的親切を以つて御導きを下さいました。人間精神の發展力の阻止固定を飽くまで避けられた先生の信條は、この信條の下に導かれた私共の側からすれば、形なき鑄型に投ぜられた感がありました。私共の行動は自由の極みであつて、而も放縱に流れ得ない「嚴肅なる自由」だつたのであります。私が一度このことを先生に申し述べたことのある時に、“それが教育なのだ”と言つて先生は微笑れました。私共が學生として生物學の豫備的知識を授けら

れる場合にあたつても、之等の知識が私共によつて心無く受けとられることを戒められ、之等の成果が得らるるに至る迄の探究の作業的部分を原典によつて示されました。かの印象深い先生のプリントも又その試みの1つであつたと存じます。研究の行的部分、探究そのことの内容こそ先生の最も重んぜられた處でありました。その成果に関しては、成否共に極めて自然な態度を持せられました。このことは私にとつて忘れ得ない感銘であります。先生に於ては「學」は飽迄も「學者」に於ての學であり、單なる學は無意味なことでありました。「學する者」はあつても單なる「學」は抽象の所産かと存ぜられます。學と者との合一、信と行との無碍の融合が先生の上に具現せられてありました。先生に接觸する歲月の重るに連れて、私には「學者」と云ふよりもむしろ「眞劍なる生活者」としての先生が現れて参りました。學問と申しましても夫は私共が世に生きる1つの生活形態でございます。夫が理智のことに係る故に特に神聖な業とは存ぜられません。とは申しましても夫は又遊びに墮することでもないと存じます。このことは先生は身を以つて示されたことでもあります。先生に於ては「學」完成の方法は即ち「人間」完成の方法でもありました。“selbsttätig”の態度は即ち求道の態度に他なりません。先生が御自身の生活態度の根本規範をその講義の冒頭に掲げられたことは誠に意義深いことと渴仰の極みに存じます。

之等のことをなさいますのにも、然し、先生のなさり方には少しの無理もございませんでした。如何なる場合に於ても、事の真相の見落しから来る過剰な熱狂は見られませんでした。明哲な頭腦は常に窮極の斷案を端的に與へて下さいました。先生には又世の常の故意とらしさや氣取りと云ふものは微塵も見られないものでありました。あの豊かな天才を抱かれて居たに拘らず、御自身は慎しく、注意深き努力の人として振舞はれました。之は實に有難いことと存じます。先生は私の拙い原稿に丹念な筆をお入れ下され、一々夫を私にお送り下さるのが常でありました。“一度間違へた所は二度繰返へさぬやうに”，又“自分の訂正によつて完全になつたと思つてはならない、銀時計は幾何ら繕しても金時計には成らないのだから”と申され、私の依頼心を戒められました。昨年6月11日の夕方と記憶致します。篤い病床の先生に御面會を許れました時、先生は看護婦に命ぜられて、痛々しく破られた腹壁の手術の箇所を私に示されました。先生は實にこのやうな篤いお方であられました。勿體なく、おいたわしく存じます。それにつけましても私は“Travailler, travailler, toujours.” PASTEURの言葉が今胸に浮びます。先生が御存命の折は何となく過ぎてゐましたことも、もう御亡くなりになつて了はれた今は様々に憶ひ起されることのみ多くあります。然しながら、兎も角も私は青年期に於て先生にお會ひ出来たことは私の幸運と存じます。それによつて私のたどたどしい學究の生活も私なりの意味を持ち得たことは有難く存じます。

先生の御精神は百年、二百年の後にも消えることとは存じません。然し現に先生と時代を同じくし親しく御教示を仰ぎ得た私共にとつては先生の溫容は又堪へ難い追憶を呼びます。茂り深い先生の巢鴨のお宅、質素な先生の御書齋等、總べて先生にからまる深い想出で御座ります。

筆を擱くに臨んで、私は、猶私に残されてある生涯に於て、尊い先生の御教示に忝ることのないやうにと懼れ、靈界に御照覽下さる先生の御精神に副ひ奉りたいと願ふばかりで御座います。

五島先生の追憶

妹尾秀實

忘れもせぬ、昨年5月24日の朝であつた。所用のため久方振りに巢鴨の先生の門を叩いたのである。何時もの温顔を拜すると思ひしに、先生は御疲労の御様子で、御自身で玄關にお出ましになり、「實は此頃、少し黄疽の氣味で能くないので、昨日呉さんに診察して貰つたら、病氣診断の爲に2、3日入院せよといはれ、今日午後から出掛ける。併し數日後には退院して、此宅で靜養する積りである」とのお話を承つた。私は大いに驚いて、切に御療養第一に遊ばすやうにと御挨拶を申し上げて辭去したのであつた。其時先生は「入院しても、それは病氣診断の爲で短時日の事であるから、教室の谷津、合田兩氏へも心配しないやうに言つて呉れ」と附言されたので、其足で本郷へ廻り谷津先生と合田氏へお傳へした次第であつた。

數日を経て呉内科の第一號室へお見舞したところ、先日比べてお顔に黄色が増し、お疲れが加つたやうにお見受けしたので、先生お元氣を出して下さいと申し上げたら、「どうも食物が攝れない」とのお答でした。それで身内の年寄りが非常に消化器を害し、何も頂けなくなつたとき、幾日も續いて大量の葡萄糖注射を受け、お蔭で元氣恢復し、遂に普通食が頂けるやうになり、ピンピンして退院した實話を申し上げたら、先生は「醫術が進んだため、以前には助からなかつたものでも今日では全快するやうになつて仕合せである」と仰せられたことを覚えてゐる。

ほんの2、3日の入院で直ちに巢鴨へ歸るといつてゐられたのが、御病氣の進行によりそれも叶はせられず、其後お見舞に行く毎に、次第に衰弱が加はつて來るやうに拜された。御看護の令嬢から、「けふ受持の先生から餘程念の入つた病氣で、病名は輸膽管閉塞であるといはれた」とのお話を伺つて心を暗くして辭去したこともあつた。

越えて6月8日は呉内科から都築外科へお移りになつて、10日には膽嚢穿孔の大手術を受けられ、350瓦の大量の膽汁を排出された。それから食慾も出で小康を得られたので、一時は大いに安堵したのであるが、其後又御病勢は一進一退し、御入院後滿1ヶ月後の6月24日には、合田氏よりの電話にて馳せつけた位の險惡な御容體となられ、毎時間の注射にて漸く落ち付かれたやうな次第であつた。之に反し7月の初め頃には大いに快方に向はせられ、4日には鶏肉スープ1合、果汁其他を攝取せられ、總べての御容體よろしく、呉博士は先生に對し、御病氣の峠を既に越えられたと話された位であつた。丁度其頃であつた、先生は御令息をして、ホノルル桑港間を航海中の畑井教授に病氣を心配しなくともよろしいとの意味を無線電信を以て發信せしめられたのである。此時こそ、再起可能の御意識が湧き出でたのであ